

球磨川に荒瀬ダムができて
るまでは、人吉―八代間の
物資輸送の多くはまだ水運
に依存していた。水運にお
いて中心的な役割を果たし
てきたのは、旧坂本村（現
在の八代市坂本町）の人々
である。昭和7年地元尋常
小学校が編集した「郷土読
本」にも、「本村より球磨川
を奪えば後に何も残らずと
云うも過言にはあらず、総
ての精神文化も物質文化も
将又凡ゆる物資・物産も、
球磨川によりて輸入され、
又輸出せらるるなり」と記
されているというように、近
年まで旧坂本村にとって、
球磨川が総てであったこと
は容易に想像がつく。また、
荒瀬ダム建設前の昭和27年
においても、旧坂本村には
400人を超える「鮎かけ
漁師」、55人の舟師、44名
の流筏師がいたという。村
の経済は球磨川があればこ
そであった。今坂本町の人
たちと話して感じて感じる球
磨川への誇りともいえる愛着
は、旧坂本村が人吉の舟の
倍の輸送力を持つ舟を作る
技術を持っていたことや、各

地の舟路を開くにも村から
技術指導に向向していたこ
となどからきているのかもし
れない。
そういう村に、昭和29年
荒瀬ダムが建設される。戦
後の電力需要の急増に対応
するための、「球磨川電源開

のである。球磨川漁協には、
五千万円の補償金を支払っ
ているが、河口の八代漁協
には「海への影響はない」の
一言で、同意すら得ていない。
一般家庭への電気の供給
も十分でなく、誰もダムの
弊害を認識していない時代
である。その時の事業者で
ある熊本県が、嘘八百を並
び立て、住民を欺いてダム
建設を進めたとは思っていな
い。事業者や地元にとっても
「夢のダム」であったのも事
実であろう。

しかし、ダムの害はダム
の運用後すぐに現れる。予
想もしなかった放流時の振
動は、ダムサイトの家を揺
るがし、夜も眠れない程で
あり、壁に亀裂を走らせ、
屋根瓦を落とした。
洪水時には、それまで床
下程度であった浸水被害が
短時間で2階までくる被害
を起すようになった。ダム
建設前は、水の増え方と
空模様で水位を予測し、そ
こまでの浸水対策を行うと、
家はほつたらかして、濁
り掬い（鮎捕り）に家族総
出で出かける余裕があった。

何よりアユやウナギ、ド
ンコなど球磨川に生息する
魚種は種類も数も激減し
た。泉村や五木村、また球
磨川本流上流の昔の生物調
査報告書を見ると、アユや
ウナギ、ヨシノボリなどの回
遊性のある魚が普通にいた
ことが分かる。上流で生活
していても、遡上してくるア
ユやウナギを採捕すること
で海の恵みを得て、川と海
がつながりを感じていたこと
だろう。今上流の人間が下
流の恵みを実感できる機会
はどのくらいあるだろう。

ある。流域圏こそが、一つの
経済圏であった。流域の自
然資源の上に成り立っていた
生業によって生じる現金も
また、淀みなく流域を流れ
ていたのである。
ダム建設によって、私たち
は確かに発電の恩恵を受け
てきた。また、道路網の発
達により便利になった。しか
し、地方の恵みや金・人が
流域を循環するのではなく、
中央に吸い上げられるシス
テムが完成しただけではな
いのか。その反省から、水で

つながっている一つの水圏で
ある流域圏を経済圏として
捉えようという研究や試み
が、今全国でも始まっている。
荒瀬ダムが撤去されて、
球磨川や不知火海の自然が
回復し、川が介する自然の
恵みを流域の人々が再び共
有できれば、球磨川流域と
いう経済圏がまた活力を取
り戻すきっかけになることは
間違いない。
【つる・しようこ、環境カウ
ンセラー、八代市】

球磨川流域圏の再生は 荒瀬ダム撤去から

つる 詳子

発」の一環で、時の桜井県
知事は、「熊本県100年の
大計」であるとして、地元
坂本村にも、ダムが出来る
と「観光客が押し寄せると」
「観光客が押し寄せると」電
気代はタダになる」「漁獲高
は（放流により）増える」「大
水もなくなる」と説明する

ダム建設前後では、総ての
洪水が出水の仕方でも違えば
被害の程度も全く変化した
のである。水害後に残る悪
臭を放つ大量の土砂堆積は、
ダム湖に堆積したヘドロ以外
では説明がつかないものであ
る。

ダムという河川横断構造
物の建設は、生物の往来を
阻害するだけではない。ダム
が建設される前は、物資
も人も舟によって、上流と
下流を往来していた。すな
はち、お金が川を介して、
流域の中を循環していたので

ある。流域圏こそが、一つの
経済圏であった。流域の自
然資源の上に成り立っていた
生業によって生じる現金も
また、淀みなく流域を流れ
ていたのである。
ダム建設によって、私たち
は確かに発電の恩恵を受け
てきた。また、道路網の発
達により便利になった。しか
し、地方の恵みや金・人が
流域を循環するのではなく、
中央に吸い上げられるシス
テムが完成しただけではな
いのか。その反省から、水で

つながっている一つの水圏で
ある流域圏を経済圏として
捉えようという研究や試み
が、今全国でも始まっている。
荒瀬ダムが撤去されて、
球磨川や不知火海の自然が
回復し、川が介する自然の
恵みを流域の人々が再び共
有できれば、球磨川流域と
いう経済圏がまた活力を取
り戻すきっかけになることは
間違いない。
【つる・しようこ、環境カウ
ンセラー、八代市】

ある。流域圏こそが、一つの
経済圏であった。流域の自
然資源の上に成り立っていた
生業によって生じる現金も
また、淀みなく流域を流れ
ていたのである。
ダム建設によって、私たち
は確かに発電の恩恵を受け
てきた。また、道路網の発
達により便利になった。しか
し、地方の恵みや金・人が
流域を循環するのではなく、
中央に吸い上げられるシス
テムが完成しただけではな
いのか。その反省から、水で

正 賀



西方浄殿 (人吉市下薩摩瀬町696-1)
☎22-4469

優良葬儀社全国ネットワーク

(有)くまべ創苑舎 (人吉市紺屋町33)
☎24-0948